

日本における「周恩来精神」受容の一側面
——文化交流、教育交流の視点から——

創価大学 高橋強

1. はじめに
2. 「周恩来と日中友好」写真展を通して
3. 「人間教育論 B」教養講座を通して
4. むすびに

1. はじめに

2022 年日中国交正常化 50 周年を記念して、「桜よ海棠よ永遠に—周恩来と日中友好」写真展実行委員会主催（主催団体：中国友好平和発展基金会、中国国際交流協会、淮安市人民対外友好協会、淮安周恩来記念館、北京大鸞翔宇慈善基金会、創価学会。後援団体：中華人民共和国駐日本国大使館、中華人民共和国駐大阪総領事館（京都展）、日中友好協会、日本国際貿易促進協会、日中文化交流協会、日中経済協会、日中協会、日中友好会館、中国文化センター、創価大学、周恩来平和研究所）による同写真展が、日本では東京（9 月）、京都（10 月）、仙台（11 月）で、中国では北京（9 月）、淮安（10 月）で開催された。参観者は日本側だけでも約 7 千人を数える。

また同年 4 月に創価大学通信教育部にて「人間教育論 B」という教養講座が開設され、その中には「平和主義『民衆外交』思想と日中友好」、「『周池（周恩来と池田大作）の友情』と『周池精神』」と題した周恩来総理に関する講座もあった。なお年間の受講生は約 150 名であった。

本報告は、まず上記の「周恩来と日中友好」写真展及び「人間教育論 B」教養講座を通して、どのような「周恩来精神」が受容されていったのかを分析・考察する。次に、前者は文化交流、後者は教育交流の様式を通じたものになっているので、「周恩来精神」受容に際して両者の交流様式がどのような効果を発揮することになるのかを分析・考察する。創価大学創立者池田大作氏は民衆交流において、文化交流は永遠性と普遍性の翼を提供し、教育交流は平等性と共感の絆を提供すると述べ二つの交流様式に大きな期待を寄せている。(1)

上記の分析・考察に際しては、同写真展では「アンケート」(2) を同教養講座では「受講者の声」(3) を使用する。なお「アンケート」は東京展、京都展、仙台展でそれぞれ回収されたがアンケートに記載された内容的には三都市において共通性が見られるので、本報告では東京展（65 人）、京都展（51 人）を扱うものとする。

2. 「周恩来と日中友好」写真展を通して

同写真展は4部構成となっている。(4) 第1部は「日本に渡り救国の道を探る」で、故郷である江蘇省淮安の紹介に始まり、思想の核を形成した天津の南開学校時代や日本留学期を紹介している。第2部は「日中民間交流を促進」では、初代外交部長でもあった周恩来総理が日中両国の関係打開の道を開こうと尽力した行動を紹介している。第3部は「日中国交正常化を実現」では、1972年9月29日に北京で行われた「日中共同声明」調印式前後を中心に、正常化が実現するに至る経緯を紹介している。第4部は「日中友好を世代代に」では、日本各界から寄せられた評価が紹介されている。

本章では特に東京展、京都展で寄せられた「アンケート」(5)計116枚を使用して、(1)「周恩来総理に対する印象」、(2)「周恩来総理から感銘を受けた内容」、(3)「周総理の生涯に対する興味」、(4)「将来の日中友好について」、(5)「今後の抱負」の観点から整理し考察する。

(1) 「周恩来総理に対する印象」

最も多かったキーワードは「偉大」であった。それは20代から70代まで幅広い年齢層において見られる。偉大の示す内容は多岐にわたる。例えば「建国の父であり、世界の模範となる人格者」(50代・女性、70代・女性2人)、「生涯において成し遂げた功績」(20代・男性、60代・女性)、「人々をまた日中友好及び世界平和を輝かせた」(70代・女性)、「歴史の流れを大きく変えた」(70代・女性)、「傑出した政治家・外交官」(30代・男性)、「中国を愛し、人を愛し、平和の為に一生を捧げた政治家」(70代・女性)等。60代のある女性は偉大な人物とした上で、「お亡くなりになった時、子供だった私は、とても悲しく声を出して泣きました」と記している。

次に多かったのは「民衆の為に尽くした」(30代・男性2人、50代・女性3人、50代男性2人、60代・女性2人、70代・女性4人、70代・男性)であった。具体的な内容は記していないが、前述の「偉大」や次に取り上げる「素晴らしい」の印象の背景にある内容であると考えられる。

次に多かったのは「素晴らしい」である。この言葉はよく日本人が使う言葉で、「すぐれていて、無条件に誉めたたえられる有様」という意味がある。「偉大」と同じ意味合いで使われる場合もある。何が素晴らしいかとなると内容は多岐にわたる。例えば「人柄」(60代・女性4人、70代・女性2人、80代・女性2人)、「人格」(70代・男性)、「行動や考え方」(50代・女性)、「人間性」(70代・女性)等。

次に多かったのは「誠実」である。「誠実な人」(50代・女性、60代女性2人、70代・女性2人)、「誠実な生涯」(70代・男性)等のように表現されている。70

代のある女性は「誠実さに心が震えました」と記している。

次は「志」である。「志の高い人」(60代・女性2人)、「知識人と政治家を合せたような志の大きい人物」(60代・女性)、「志が一貫している日中友好の指導者」(60代・男性)等の記述が見える。“志が一貫”と関連して「不屈の精神」(60代・女性)という表現もある。

次は「政治家」である。「バランス感覚に富み、人徳で人民を引きつけた」(60代・男性)、「20世紀世界第一の政治家」(50代・男性)といった記述があった。

上記以外にも、「平和を愛した人」(60代・女性、70代・女性2人)、「私情を挟まない世界の歴史上でも稀な人物」(20代・男性2人、40代・女性)、「尊敬できる人物」(60代・女性、70代・男性2人)、「温かい人」(40代・女性、50代・女性、80代・女性)、「正視眼で物事を見られる人物」(70代・女性)、「慈悲深くて優しくて信念の強い人」(40代・女性)、「思いやりの深い人」(50代・女性)等の記述が見られる。8歳のある男の子は「かっこいい人、立派な人」と印象を書いている。

(2) 「周恩来総理から感銘を受けた内容」

ここでは最初に「日本に対する心、貢献」と「中国に対する心、貢献」の観点から整理する。「日本に対する心、貢献」の観点からすると、最も多かったのは「周総理は日本を愛し、日本をよく知っておられた(日本との協力は不可欠と思われた、を含めて)」(40代・女性2人、50代・女性5人、60代・女性3人、60代・男性2人、70代・女性5人)であった。次に多かったのは「日本に対する戦争賠償放棄を貫かれたこと」(40代・女性2人、50代・女性、60代・女性2人、70代・女性2人、70代・男性2人)であった。

また「日中友好への一貫した行動と卓越さ」(30代・男性、40代・女性、50代・女性2人、60代・女性3人)といった記述もあった。このことと関連すると思われるが「常に変わらず沢山の日本の人々と友好を結ばれていた」(30代・女性、50代・男性3人、50代・女性2人)といった表現もあった。以上の内容を踏まえて「“井戸水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れてはならない”の言葉」(50代・女性、60代・女性2人)という記述もあった。

これら以外にも、「日本に対する以民促官政策」(50代・女性3人)、「日本との懸け橋になられたこと」(40代・女性2人、60代・男性)、「日中友好の大恩人」(60代・女性、60代・男性)、「スポーツ交流における貢献」(20代・男性2人)、「文化交流における貢献」(40代・女性)、「日本との縁の深さ」(70代・男性)等の記述があった。なお40代のある女性は「卓球の選手(松崎君代さん)の方とのエピソードを読んで涙がでました。周総理に会いたいと心から思いました」と記述していた。

次に「中国に対する心、貢献」の観点からすると、「幼い時から中国を思う志（愛国精神）を持ち続けた」（50代・女性3人、50代・男性2人、60代・女性、70代・女性2人）、また「今、中国は世界第2位の経済大国。周総理の築いた大きな財産だと思います」（50代・男性）といった記述があった。

上記の2つの観点以外に、周総理の「行動力やその奥深さ」（60代・女性2人）や「周総理の思想（平和、幸福についての）や境涯」（20代・男性、70代・女性）といった記述もあった。なお70代のある女性は「子どもの頃から写真を見て大好きでした。人の為にとこれほどまでに心を尽くせる方だったのかと、涙が出そうになりました」と書いている。

（3）「周総理の生涯に対する興味」

最も多かったキーワードは「日本留学時期」（20代・男性2人、40代・男性2人、60代・男性2人、70代・女性2人、70代・男性）で、「1年半の日本滞在中で感得されたものは何かに興味をもった」（60代・男性）といった記述もあった。

次は「幼少期」（50代・女性2人、60代・女性2人、70代・男性2人）で、その中でも「幼少期の勤勉さ」（50代・女性3人）という表現もあった。「幼少期」でいうと周総理を育てた生母と継母に対する記述もあった。「2人のお母様の幼い時の影響は、その人の考え方や生き方に大きく影響する」（50代・男性2人、60代・女性、70代・女性）と表現している。

上記以外にも「青年期の志の高さと深さ」（60代・女性2人）という記述もあった。なお20代のある男性は「周総理のように、若いときに学んでいく人でありたいと感じたので、今日から決意をして、良書を読み、学問の探究を始めたいと思った」と書いている。

（4）「将来の日中友好について」

最も多かったキーワードは「民間友好」であった。それは20代から80代まで幅広い年齢層において見られる。例えば「政治上はどうであれ、民衆と民衆の結びつきの大切さを現在は強く感じる」（50代・男性2人、60代・男性2人、70代・女性）、「対話の大切さ、信義、友情の熱き心、人間対人間との思いが強ければ、今の世情も変えられる」（60代・女性2人、70代・女性、80代・女性2人）、「国は人あってのもので、人と人の友好交流を絶やさないこと」（60代・男性3人）、「隣国同士、絶対に不仲であってはいけない」（60代・女性2人、70代・女性）等。その方法として「青年交流」（40代・女性2人、60代・男性2人、70代・男性）、「文化交流」（20代・男性2人）、「多面的な交流」（40代・女性2人）、「教育交流」（70代・女性）といった記述がある。

次に多かったキーワードは「周恩来総理」である。例えば「周総理も含め先人

の思いを忘れないこと」(40代・女性2人、50代・男性2人、60代・女性2人)、「周総理の高い志を学び、古き友を大切にすること」(60代・女性2人、60代・男性)等。これら以外に、「周総理の提唱した民を以て官を促す実践をすること(50代・男性)、「難しい時代であるが中国を信じ、周総理の中国の人々を信じ抜きたい」(20代・男性)、「周総理のような偉大な人物を産んだ中国という国をもっと知っていくべきである」(70代・女性)といった記述もあった。

次は「心」である。例えば「互いの国を思いやる心」(50代・女性3人)、「寛大な心、同じ人間という心」(60歳・女性)、「未来を諦めない心」(50代・女性)等。「心」という言葉ではないが関連する内容として「信頼」という記述もあった。例えば「互いに信頼することから出発」(70代・女性3人)、「人間への信頼」(40代・女性)等。

次は「教育(実際は“育てる”“教える”と記述)」である。例えば「歴史を知る教育」(20代・男性2人、70代・女性3人)、「日本の文化はその多くが中国から来た事、差別感をなくす事を学校で教えて欲しい」(70代・女性)、「世の中が変わっても、変わらない友好の心を育てていくこと」(50歳・男性)等。なお50代のある女性は「素直な子供のような心で、正しいものは正しく、美しいものは美しいと捉えられる心を育てていくこと」と書いている。

次は「子供」である。例えば「先人の築いてくださった金の橋を更に強く太くして、子供の世代に受け渡すことが大切です」(40代・女性2人)、「政治に惑わされることなく、今も脈々と続いている民間外交を後継の未来の子供たちにつなげていきたい」(70代・女性)等。

上記以外にも、「メディアが正しい情報を流すこと」(40代・女性2人、50代・女性)、「政治レベルでの深い交流」(40代・女性、70代・女性2人)、「国の指導者の平和への対話」(70代・女性)といった記述があった。なお8歳のある男の子は「戦争しないでミサイルを捨てる。お互いの歴史を知る。お手紙を送る。一緒にパーティーに参加する」と書いていた。

(5)「今後の抱負」

抱負の中の多くは「中国のことをもっと知り、この(友好)の流れを永遠に継いでいきたい」(20代・男性)、「偉大な歴史の真実を末長く伝えていかねばならない」(60代・男性)といった内容であるが、「周総理」の言葉が入った内容も少なくなかった。影響力の大きさを痛感する。例えば「井戸を掘ってくれた人の恩を忘れることのないように、友好の灯が消えないように、周総理の思いを引き継ぎたいと改めて決意しました」(60代・女性)、「周総理のように、たくさんの方々と友好を結べる人へと成長していきたいと思いました」(30代・女性)等。なお9歳の女の子は平仮名で「しゅうおんらいという人をはじめてしました。

まだまだ知らないことがあるけどまたこんどきてもっとしりたいです。すごかったです」と記している。

3. 「人間教育論」教養講座を通して

創価大学通信教育部は2022年4月「人間教育論B」という教養講座を新しく開設した。「人間教育」は同大学が創立者池田大作氏の教育理念に基づいて推進している教育である。同講座は学外の研究者特に中国の研究者が、池田氏の教育理念をどのように捉えているのかを探求する為に開設された（「人間教育論A」は学内の教員による講義）。

同講座の講義テーマは、「世界市民教育」、「人間主義・人間革命論」、「国家指導者の役割」、「児童文学における倫理価値」、「『平和』『対話』と二十一世紀の『女性』」、「幸福思想」、「平和主義、文化主義、教育主義、人間主義」等多岐にわたる。テーマが多岐にわたるのは池田氏の教育への考え方と関連する。池田氏は「教育とは人間の内なる無限の可能性を開き鍛え、そのエネルギーを価値の創造へと導き、社会を築き、時代を決する根源の力である」（6）と捉えている。

2022年は日中国交正常化50周年という年でもあったので、上記以外に「平和主義『民衆外交』思想と日中友好」、「『周池（周恩来と池田大作）の友情』と『周池精神』」という関連のテーマも伺える。以下、両講義の内容（7）とそれに対する「受講者の声」を紹介する。

（1）黄順力教授は「平和主義『民衆外交』思想と日中友好」というテーマの下講義を行った。その中で周恩来総理の「民間外交」について次のように述べている。

中国の民間外交は、当時の外交の困難な局面を打開するために、中国政府が周恩来総理を代表として「官民并举，以民促官」（政府と民間が同時に努力し、民間交流が政府間交流を後押しする）との外交基本方針を提出したもので、これは、民間が先行して政府の外交の開拓と発展を押し進めるというものである。

1950年代初期周恩来総理は、日本との外交の中で民間先行の積極的な働きを強調していた。この民間先行では政府が外交をする前に民間がまずいくつかの作業をおこなう。彼は、中日の政府の外交が難航する前に両国民の団体を頻りに往来させることで、その後の政府の関係改善を有利に進めることができると考えたのである。すなわち、民間が先に両国を行き来した後に政府が両国の関係をゆっくりと改善していくということである。

彼は、日本の人々が中国に来れば来るほど、中日の両国の友好と外交関係は深まると考えたのである。民間交流の増加、民間協定の締結などの積み重ねにより国交を回復することが可能になったのである。民間先行をゆっくりと積み重ねた結果、徐々に数から質へ状況は変化し、最後には正常な国交回復へと繋がった

のである。

周恩来総理はこの民間先行の形式を「国民外交」、または「人民外交」と呼んでいる。そして「私たちは国際関係史上、初となる新たなモデルを生み出したといえるでしょう。私たちは喜ばしい思いと、国民外交を進めていく希望に満ちています。国民外交は外交の重要な役割だと捉えることができます」と述べている。中国の人民外交は、政府外交と民間外交の2つの形式を通して実現した。この2つの形式の密接な結びつきと活用によって人民外交の体系が造り上げられた。そしてこれは対外政策の最も大きな特色となった。

上記の黄教授の講義を受けた多くの受講者から声が寄せられた。その多くは「民間外交」から想起される交流様式と、「民間外交」による目的達成への自信に関するものである。

交流様式の中で重視していたのは「対話」であった。例えば「一人一人の力は小さいものであるが、広い視野と勇気を持ってそれぞれが対話をし続けることによって、やがてそれが民衆の意見となり団結していくことで、国だけでなく世界をも平和にしていく力を持つことができると感じた」(文学部・20代・女性・)、「『対話を続けること』が重要である。人間が起こした問題は、人間にのみ解決できる。歴史は人間によって作られるのだと痛感した」(文学部・20代・女性)、「どのような時代の変化があろうとも、心を通わせる継続的な対話と草の根の交流が、アジアの平和と世界の平和を作るとの思いで進んでいきたい」(科目等履修生・60代・女性)、「民衆同士特に青年が友好関係を作り、わだかまりを無くすことが平和へとつながっていくと確信することができた」(教育学部・20代・女性)、「『国家と国家』では複雑に見える問題も、人間対人間の交流の積み重ねで信頼を築くことができ、国家レベルの問題を解決に導くと感じるようになった」(文学部・30代・女性)、「『国家と国家』による外交は最重要であるが、その根幹を支える『民間外交』にこそ平和的解決の糸口があるように思う」(法学部・30代・男性)等。

上記以外にも「民間外交」を身近に感じたという受講生の声(共感の深さ)もあった。例えば「自分一人では何もできないという無力感を打ち破って、身近な所から対話に挑戦し、平和に貢献していきたい」(文学部・30代・女性)、「『外交』は庶民に無関係ではないことを痛感した」(文学部・50代・女性)等。また「民間外交」を通して日中国交正常化に導いていった貢献に対して「周恩来総理はアジアだけでなく、世界において最も著名な平和を愛する政治家であると尊敬している」(文学部・70代・女性)という受講生の声も寄せられた。

(2) 紀重光教授は「『周池(周恩来と池田大作)の友情』と『周池精神』」と

というテーマの下講義を行った。その中で『周池精神』を次のように展開した。

周恩来総理と池田大作氏は日中友好に力を注いだ。両者には共通して「差異尊重、平等交流、相互学習、未来共創」の精神が溢れている。1つ目の「差異尊重」は中日友好事業の基礎となっている。差異とは世界に常に存在するものだからこそ、差異を尊重するということは偉大な事業の基礎になる。差異を克服する上で、包容力と愛情の深さは重要である。

2つ目は「平等交流」である。両者は中日国交正常化事業の過程で特に平等な立場で交流することを、友好を築く基礎として非常に重視している。この平等は人類の幸福をもたらす重要な基盤となる思想である。

3つ目は「相互学習」である。相互学習とは、差異を尊重する中で新たな価値を発見するということである。友好関係をもう一步発展させるためには学ぶ姿勢が必要である。また差異にぶつかった際には差異を包み込み、学ぶことが必要である。

4つ目は「共創未来」である。両者は差異の尊重を重視し、平等で心を開いた交流、相互学習を重視している。なぜなら、最終目標として、国と国、民族と民族、人間と人間が助け合い、共に平和と美しい人類の未来を創るためだからである。周恩来総理は池田氏と会談された際「この20世紀最後の25年は人類社会にとって最重要の期間である。平等な立場で互いに協力し、共に努力する必要がある。これを体現できれば人類社会を共創する未来が期待できます」と語っている。

この16字を更に凝縮するとしたら、2字で表すことができる。まず一文字目は「信」である。人類の幸福の鍵は自信であり、人類社会の調和の鍵は信頼である。自信と信頼の鍵は「信」です。誠実な対応によって人は信じてくれるので、心を開いた交流は最も重要な方法である。

二文字目は「世」である。「世」は時間の次元、世代を表している。両者は未来永劫の友好を追い求めている。「世」はまた世代という空間を超えた「世界」でもある。人類的視野を表している。中国人の幸福、日本人の幸福だけでなく人類の幸福が最も重要である。我々は時間と空間の入り交じった「世」にいる。

上記の紀教授の講義を受けた受講者から声が寄せられた。その多くが「周池精神」から学び得た内容であった。例えば「差異を受け入れ理解し、よりよい考えや行動を模索することこそが、日中友好、また世界平和につながるのだと再度実感できた」(文学部・10代・男性)、「多様性を認め合うことが日中のみならず、世界の人々と世界平和をつくる道への鍵となることを理解した」(文学部・50代・女性)、「今日、難民問題、地域紛争等が止まないが、互いの立場を理解しようとしないうまま、自分中心の考えで即行動を起こすことが背景にあるように思う。

『周池精神』の差異尊重とあるように、平等の立場で認め合う勇気が必要であると思う」(文学部・60代・女性)、「周池精神から学んだ差異を認め、相手に対し共感心を持って世界の人々と交流していこうと思う」(文学部・60代・女性)、「周池精神から、一人の人間として相手を尊重できる社会が必要であることを学んだ。しかしこの尊重することは簡単なようで大変に、大変に、難しい。多様性や価値観を認め合うことは至難の業かもしれないが、一人の人間として相手を尊重しない限り平和な社会は築けないだろう。どうしたら互いに尊重し共存しあえるか、という問いを常時自分の人生に定着させ意識を変えるよう学び続ける」(文学部・50代・女性)等。

上記以外にも「周池精神」は「文化の多様性のある中、調和のとれた世界を構築する方法」(文学部・60代・女性)(教育学部・60代・女性)と評価する受講生の声や、また自身の生活の中で捉え「『周池精神』は、生活の中で応用、実践できるものなので継承することが今の私にできることだと感じた」(教育学部・40代・女性)、「『周池精神』を日々の生活の中で体現することを目指すべきであると思った。『周池精神』は世界の平和、他者の幸福に直結し、結局は自身の幸福につながるからである」(文学部・20代・女性)といった受講生の声もあった。

更に次のように「周池精神」の意義を指摘する声もあった。即ち「『周池精神』は、人類社会が複雑に錯綜する中で平和友好、共に創造する美しい未来に向かうために必要な意義深いものである」(教育学部・50代・女性)、「『周池精神』は、国と国の威信が対立し膠着した壁を乗り越えるために、民間交流を推進する際に心掛けることが必要なもの」(文学部・60代・男性)等。

4. むすびに

「周恩来と日中友好」写真展の「アンケート」及び「人間教育論B」教養講座の「受講者の声」の分析から、受容されたと考えられる「周恩来精神」をキーワードで示すと以下のようなになる。

前者からは、「人々をまた日中友好及び世界平和を輝かせる」、「中国を愛し、人を愛し、平和の為に一生を捧げる」、「民衆の為に尽くす」、「志が一貫している」、「不屈」、「平和を愛する」、「私情を挟まない」、「正視眼で物事を見る」、「慈悲」、「思いやり」、「行動が一貫している」、「常に変わらず友好を結ぶ」、「以民促官」、「中国への思い(祖国愛)」、「勤勉」、「民間友好」、「たくさんの人々と友好を結ぶ」である。後者からは、「民間外交」、「差異を受け入れ理解する」、「多様性を認め合う」、「平等の立場で認め合う」、「差異を認め、相手に対し共感心を持つ」「一人の人間として相手を尊重する」である。

前者は、写真展の内容が周恩来総理の生涯や国交正常化、日中友好への尽力も扱っているため、受容した周恩来精神も多岐にわたっている。後者は、特定のテ

一マの下での受容となっている。また前者の具体的な表現に対して、後者はやや抽象的な表現となっている。

上記写真展は、文化交流の特色が極めて有効的に発揮された写真展であった。即ち、周恩来総理の魅力、写真という媒体を通してという前提はあるものの、例えば「卓球の選手の方とのエピソードを読んで涙がでました」、「人の為にこれほどまでに心を尽くせる方だったのかと、涙が出そうになりました」等からは文化交流の原点である「人間と人間の共鳴」が伺える。またここには民族を超えた普遍性すら表現されているように思える。

また上記の前提はあるものの、「世の中が変わっても、変わらない友好の心を育てていくこと」、「素直な子供のような心で、正しいものは正しく、美しいものは美しいと捉えられる心を育てていくこと」、更に「先人の築いてくださった金の橋を更に強く太くして、子供の世代に受け渡す」、「中国のことをもっと知り、この（友好）の流れを永遠に継いでいく」等からは、文化交流の機能の一つである「新しい価値の創造」さえ伺える。なお後者の内容、“受け渡す”“永遠に継いでいく”には永続性が表現されているように思える。またここからは「人間と人間の共鳴」が時間を超えていることがわかる。

周恩来精神の受容においては、普遍性や永続性をもたらすという観点からも、今後も文化交流という様式を堅持することが有益であると考えている。

なお周恩来精神は、「将来の日中友好」（アンケートを整理した際の一つの観点）の項目の中では、2番目に多かったキーワードであった。最も多かったキーワードは「民間友好」であったが、これは周恩来精神の一つである。このことから周恩来精神は、今後日中友好の象徴となり得ることを証明していると考えている。

上記教養講座においては、受講者の声に対しては講師からコメントがなされ、講師と受講生との双方向教育が設定されているので、受講者が学び得た内容は定着し思索が深まり、また新たな価値の創造に繋がっていくことが考えられる。

「民間外交」から想起した新たな交流様式、例えば「対話」、「草の根の交流」、「青年の友好関係」等や、「周池精神」の内容を自身の言葉に置き換える、例えば「平等の立場で認め合う勇気」、「差異を認め、相手に対し共感心を持つ」等はその例である。

両講座も物事の本質や真理への探究、具体的にいうと「民間外交」とは何か、また「周池精神」とは何かに対する探究であったので、究極的には人間の行動や精神への深い考察を行っている。故に受講生の声の中には「一人の人間として」、「一人一人の力」、「人間が起こした問題」、「歴史は人間によって作られる」等の表現が見られる。このように一人の人間としての意識に立脚することにより、他者も一人の人間として意識することができ、最終的には同じ人間としての平等意識に繋がると考える。

また受講生の声の中には「周池精神」から学び取った「差異を受け入れ理解すること」、「多様性を認め合うこと」を通して日中友好や世界平和を模索したい等の表現が見られるが、ここからは「周池精神」に対する共感あるいは深い信頼さえ感じられる。

上記のごとく教育を通じた交流からは、「思索の深まり」「新たな価値創造」「平等意識の形成」「共感」といった価値がもたらされていることがわかる。故に周恩来精神の受容においては、教育交流も有効的な様式であると言えると考えている。

(注)

- (1) 池田大作「教育の道 文化の橋—私の一考察」池田大作『21世紀文明と大乗仏教—海外諸大学講演集』聖教新聞社 1996年5月 p301
- (2) 「桜よ海棠よ永遠に—周恩来と日中友好」写真展実行委員会より提供
- (3) 創価大学通信教育部より提供
- (4) 「聖教新聞」2022年9月29日付、紹介記事は同年9月27日付、10月13日付、10月28日付、11月10日付
- (5) アンケート項目：東京展「①本展の中で印象深かった内容は何でしょうか。②周恩来総理に対する印象について教えてください。②—1. 本展参観以前。②—2. 本展参観以後。③今後の日中友好を促進する上で、必要なものは何だと思われますか。」、京都展「①今回の展示会をどのようにして知りましたか。②感想などご自由にお書き下さい。③本展の運営でお気づきのことがあれば、ご記入下さい。」
- (6) 池田大作「教育の道 文化の橋—私の一考察」前掲 p295
- (7) 創価大学通信教育部より提供